

# 資料渉猟余話

その115

『夕樺』の表紙の絵ははじめ太田南海、そのあと伊藤真之介、須山計一が引き継いでいる。創刊号を描いた太田南海は松本中町生まれの彫刻家であり、はじめは彫刻を依頼したが、当時太田は中央美術協会彫刻部幹事の職にあり忙しかったので、彫刻のかわりに絵をかいてくれた。絵は天竜峡の傍らに白樺の大木を配したものである(写真3)。

『夕樺』は月一回の短歌会を開き、その図柄が替わり白樺の木の下に裸体の女性が生か首を垂れて座っている(写真4)。翌大正十一年一月第二巻第一号から伊藤真之助が描いている(写真5)。伊藤は飯田市伊賀良出身の洋画家、小学校教員と

生主義に對抗、蕉風写生を主張した。歌の俳諧の精神を歌の基本とし、象徴主義を唱えた。下伊那短歌の隆盛には太田水穂の功績は大きい。青山樺三郎は南箕輪村出身、前記『山河』を主宰する。宮崎茂は下高井郡穂波村(現山ノ内町)生まれ、長野師範卒業後、阿島、下久堅、飯田の小学校に勤務し、のち『潮音』の同人となる。窪田空穂は東筑摩郡和田村(現松本市)生まれ、国文学者、早大教授。島木赤彦は上諏訪村生まれ、アララギ派の代表的歌人であり、伊藤左千夫に師事し歌誌『アララギ』を編集、図画教育の

## 歌誌『夕樺』とその周辺 2

清水 迪 夫

しかし、『夕樺』の来た。プロレタリア文学とかブルジョア芸術だとか、ひどいものになるとプロレタリア文芸でなければほんとうのものは、言つほど

のことも時折きく、ちよつとおかぶれをこらえて主張するのをきくと、いやみで耐えられない。芸術表現に善悪貴賤などものを論ずるだ、ほんとうのもの、ほんとうのも

『夕樺』の表紙の絵ははじめ太田南海、そのあと伊藤真之介、須山計一が引き継いでいる。創刊号を描いた太田南海は松本中町生まれの彫刻家であり、はじめは彫刻を依頼したが、当時太田は中央美術協会彫刻部幹事の職にあり忙しかったので、彫刻のかわりに絵をかいてくれた。絵は天竜峡の傍らに白樺の大木を配したものである(写真3)。



(写真3)『夕樺』創刊号(表紙)



(写真4)『夕樺』第一巻十月号(表紙)



(写真5)『夕樺』第二巻一号(表紙)

『夕樺』からの離反を招いたことは、『夕樺』の全盛期は三百名を越した同人も減少した。廃刊の原因は経済的困難のほか、同人の離反があった。岡村二一ら少数を残して羽生三七、今村邦夫ら多くの同人たちが歌道より青年運動に軸足を移していった。『夕樺』によって芽生え培われた社会問題意識が、青年たちをして政治、社会への関心を高め、社会的不正、不正を憎む青年をして「歌詠み」より社会運動に駆り立て、『夕

道問えば優しく答える町の娘こよたべ入り来し街の軒端に火鉢の火大方とけて灰となれり義兄も姉も出て行き居らず  
羽生歌郎

最後に創刊当時の同人(吉川秀穂は入院中)の歌を創刊号の中から挙げておく。(以下略)

夕日赤く野の面に映えて霜萎えの桑の葉  
霜柱ふみつ、仰ぐ朝の空眼にいたきまで  
晴れにけるかも  
桑原群治

夜更かしの幾日つづきぬ身のつかれこの頃朝寝の多くなりたり  
降りやまぬ雪にふるえて今頃はは坂あり友は来るらん  
今村邦夫

地図の上に万年筆で線などひき妻に教へき我故郷を  
秋草のさゆらく野辺の夕ぐれに大空しめじみみいれる命  
阿部静波

(元)